おんなのこ×おんなのこ

ささやか椎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おんなのこ×おんなのこ

【Ｎコード】
Ｎ７５４５Ｗ

【作者名】
ささやか椎

【あらすじ】
幼少より同性に好かれやすい女子高校生弓奈は、入学を期に「女の子からモテない普通の女の子」を目指し奮闘していくのだが・・・・・同性との恋に興味がない美少女弓奈と彼女をとりまく個性的な少女たちとの運命をひも解く百合系学園ラブコメディ

1、序

弓奈が納戸の本棚を整理していると、小学校2年生の時のアルバムの隙間からこんな日記が出て来た。

『なつ休みはたのしいことをたくさんしました。おばあちゃんちにも行きました。おばあちゃんちのとなりには大きなおうちがあります。そこには白い犬と、二ひきの子ネコと、きれいなおねえさんがいます。わたしはおねえさんとあそぶのが大すきです。おねえさんとお買いものに行ったり、しゃぼん玉をしたり、いっしょにおふろに入ったりしました。おねえさんはわたしのかおをおねえさんのむねにおしあてたり、わたしのむねやおなかにケーキのクリームをぬってそれをなめたりしました。おねえさんのおっぱいはとてもやわらかくて、おねえさんのしたはクリームでぬるぬるになっていました。おばあちゃんのいえからかえるとき、おねえさんはこっそりわたしに会いにきて、おねえさんとわたしがしていたことはふたりだけのヒミツ、だれにも言わないでねと言いました。わたしが元気にうなずくとおねえさんはまわりにだれもいないのをたしかめてからわたしの口にきすをしました。ほっぺとかむねとかせなかとか、あとは足とかにしかチューをされたことがなかったので、びっくりしました。おねえさんはわたしをぎゅっとだきしめたまま、わたしのしたをチューチューとすいました。このときのおねえさんはとてもいいにおいがしました。とても気もちよかったので、おねえさんにもしてあげたくなって、わたしもおねえさんのしたをチューチューとすいました。先生も女の人だけど、女の子ときすをしたことがありますか。とても気もちよかったので先生におしえてあげようと思いました。だれにも言わないでねとおねえさんに言われたので、かくのならいいのかなと思って作文にかきました。ふゆ休みもまた

おばあちゃんちへあそびに行くので、またおとなりのおねえさんときすがしたいです。』

弓奈は顔を真っ赤にして日記をくずかごに押し込んだ。

1、序（後書き）

読んで頂きありがとうございます。本作は同性愛を扱う小説ですので苦手な方はご注意ください。稚拙ではございますが、ストーリーの完結まで責任を持って執筆いたします。文章表現等のご指摘はもちろん、作品内容に関しましてもご意見ご感想等頂ければ今後の活動にぜひとも活かしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

2、弓奈

誰もが彼女を振り返った。

透き通る肌の白に柔らかな黒髪は麗しく映え、絵画のごとく整った顔立ちに凛とした瞳が星のような輝きを灯している。彼女は名を弓奈といい、廊下を行き交う他の生徒たちと同じくサンキスト女学園の新一年生である。

弓奈は女子高校に進学することにかなり抵抗があった。ここだけの話だが、弓奈は大変同性からモテる女なのである。ちょっと外へ出掛ければ知らない女子大生にキスをされたり、塾の若い女講師に派手な宿泊施設へ連れ込まれそうになったりと、彼女には幼い頃から怪し気なエピソードが絶えない。小学校低学年の頃は単純に大人の女性に可愛がられることを喜んでいたが、やがて性的な欲求とその行動について本能的に理解し得る年頃に近づいてくると、急に自分という存在が非常に恐ろしく危なっかしいものに感じられてきたのだ。

傾向と対策というものは試験勉強にのみ重要なことではなく、自分のコンプレックスを克服するためにもぜひとも把握するべきものである。弓奈は「同性から好かれ易い」という悩みを自分なりに分析し、これに打ち克つ術をこの春休みに思いついた。弓奈の抱える悩みの大きな特徴として、年上にばかり好かれるという点があげられる。それは自分が中途半端に天然で、可愛い子ぶっているのがいけないのだと弓奈は考えた。つまり、高校生になったこの期に思い切ってイメージを切り替え、クールなキャラクターでやっていこうというのである。そうすれば弓奈を見た年上の女性たちは「生意気に格好なんか付けちゃって」と思うに違いない。人から嫌われるのは確かにいい気持ちはしないが、このまま同性愛だらけの青春を歩み続けるよりは余程マシである。弓奈は「普通の女の子」になりた

いのだ。
　入学式が終わってホールの化粧室へやってきた弓奈は鏡の中の自分とにらめっこをしている。弓奈は中学の三年間でぐっと背が伸びた。胸も大きくなり、腰は品良くくびれ脚も細く長いので充分に「クールな女」としてやっていけそうである。弓奈は今日、彼女にとって初の試みとなるポニーテールを作ってみた。言うまでもなくポニーテールは髪を高めの位置でひとつに結い、うなじの部分を見せる髪型であるが、弓奈の場合髪を下ろしている時よりもこのほうがずっと大人っぽく見える。
「よおし。」
　しゃべり方もクールな感じにしようと弓奈は思った。人が寄り付きにくいような、冷たいオーラも出せるようになればベストである。友達は確かに欲しいが、誤って恋人が出来てしまったらたまらないからだ。
「あの・・・」
　気がつけば弓奈の背後に少女が立っていた。少女は弓奈が鏡を独占していたために洗面所が使えなかったらしい。
「あは、ごめんね。はーい、どうぞぉ」
　弓奈はそう言って少女に洗面台を譲った。今のしゃべり方はクールさに欠けていた感じがあるので、次に口を開く機会があれば申し訳ないがもっと冷ややかに接しようと弓奈は思った。髪をいじりながらそんなことを考える弓奈を、少女は鏡越しにそっと見つめている。
「すみません・・・」
　ハンカチで手を拭き終わった少女が、少し間を置いてから弓奈に近づいてそう言った。
「ん、どうしたの」
　急に声を掛けられたので弓奈は少々驚いたが、クールな振りをして少女に向き直った。少女の頬は桜色で、何やら恥ずかしそうにもじもじとしていてまばたきも多い。弓奈は動揺した。

「あの・・・クラスと名前教えていただけませんか」
少女の無垢な瞳が弓奈を見上げてる。同い年の女の子からこのようなラブリーな瞳で見つめられたのは初めてだった。
「・・・私はC1組の倉木弓奈だけど」
弓奈が答えると少女は花のように可愛らしく微笑んだ。
「倉木さんですかぁ。倉木さん・・・倉木さんかぁ・・・」
弓奈はわざと無愛想な感じで返事をして少女を突き放したつもりなのだが効果はなかったらしい。少女は少しうつむいて、弓奈にも聴こえるか聴こえないかというささやくような声でこう言った。
「倉木さん、とっても素敵です・・・」
少女は弓奈に会釈してから逃げるように廊下へ飛び出していった。

弓奈はしばらくその場に立ち尽くした。やはり女子校に入ったのは失敗だったと思った。
ホームルーム開始のチャイムがゆるやかに廊下に響き始めた。

3、鉄棒

クール路線も徹底しすぎるとモテてしまうのかもしれないと弓奈は気づき始めた。年上から気に入られるほど可愛くなく、年下から好かれるほど格好良くないというのが弓奈の理想の自分である。実現のためにはまず、目立たない事が重要だ。

1年C1組の記念すべき最初の授業は体育だった。フランス語あたりの無難な授業を期待していた弓奈だったが、運動は嫌いではないので体育館への移動等の面倒さを除けば悪くないスタートではある。

ところがこれが大問題だった。今日に限って弓奈はかなりエッチなデザインの下着を身につけていたのだ。誤解しないで頂きたいのは、決して弓奈にそういった趣味があるわけではないということである。サンキスト女学園は全寮制なので、新生活を始めるにあたり必要な物資の多くを学園周辺で調達する必要がある。現在都内の工場で経理をしている沢見という女性と弓奈は知り合いなのだが、彼女がこのサンキスト女学園の出身で、寮での新生活にも詳しいため「これ、何かの足しにしてねん♪　私の可愛いユミナちゃん」というメモと共に大量の衣類を送って来てくれたのだ。そして中身をよく確認しないままに沢見のプレゼントを新生活の下着に採用してしまったことを、今朝になって弓奈は激しく後悔したという訳だ。

男性には分からない話かもしれないが、女子校の更衣室の中は少々破廉恥な場所である。自分の下着を他人に見られることを恥じらうような乙女はそうはいない。ところがラッキーなことに入学してまだ日が浅いので、更衣室の雰囲気は比較的大人しかった。これならば壁際にうずくまり、カバンでバリケードを作って、ハムスターのようにちょこちょこと着替えることが許されるだろう。少々格好わるいが、弓奈はまだサンキストの制服のシャツに慣れていないの

で体操着を着てからシャツを脱ぐなどというイリュージョンは出来ないからやむを得ない。
　弓奈がもぞもぞと着替えている間に紹介しておくと、彼女の下着はふわふわのレースをあしらっておきながら情熱的なカーマインレッドとブラックを基調としたテーマ不鮮明の逸品で、下は黒いリボン付きの一部透け透けＴバックである。なぜ沢見が弓奈の下着のサイズを知っていたのかなどはだいだい察していただきたい。
　見事誰にも見られずに着替えを成功させた弓奈を待っていたのは運動らしい運動のないオリエンテーリングだった。着替える必要なんてなかったじゃないかと弓奈は担当の先生をじっとにらんでみたりした。担当の先生は香山という若い女性で、なるべく女性を避けようとしている弓奈ではあるが、体育の担当くらいは正直女性の方がいいと思っていたのでこの点は良かった。
「えー時間が余っちゃったので、ここで先生の得意技を披露しちゃいます」
　年甲斐も無くキャピキャピした先生が望まれてもいないプチサーカスを自ら開演したがるので、生徒たちは観覧という形で彼女の趣味に付き合うことにした。先生はわざわざ室内用の鉄棒を倉庫から運び出してフロアに設置し、逆上がりで鉄棒に上がってから反対を向いて鉄棒の上に座った。
「コウモリ回りしまーす！」
　先生はそう言って元気良く後方へ体を傾けたにも関わらず、逆さまにぶら下がった状態で停止してしまった。
「あれぇ？」
　先生は盛り上がる余りコウモリ回りという技のやり方を忘れてしまったらしいのだ。弓奈は運動がそこそこ得意なので先生のコウモリ回りの何が間違っているのか一目瞭然であるが、それを指摘するほど弓奈は愚かではない。目立たないように生きる・・・今朝自分にそう誓ったばかりだからだ。しかし生徒たちは妙な雰囲気になるし、先生は逆さまのまま首をかしげているしでとても授業にならな

い。仕方なく弓奈はそっと先生に声をかけることにした。
「あの・・・先生。コウモリ回りって手を離すんだと思いますよ」
先生は弓奈のアドバイスを聴いて「ああ！」と言って鉄棒から降りた。
「君かわりにやってくれない？」
よもやと思ったが、早くもクラスで一番の美少女として注目を集め始めていた弓奈には惜しみない拍手が送られ、あっという間に引き下がれない状況が出来上がってしまった。弓奈は仕方なく立ち上がり鉄棒を握った。
あまり格好よく目立ってしまうとモテてしまう危険がある。おこがましい悩みに聴こえるだろうがこれが弓奈の現実なのである。だがせっかくこうして皆の前に出た以上サクッと成功させてしまいたい気もする。
「・・・よいしょ」
弓奈が鉄棒に上がっただけで数人の女子生徒から歓声があがった。この時の弓奈のかっこよさといったら、のちに生徒たちの夢に出るほどである。弓奈は鉄棒に座って手を離し、後ろ向きに回り始めた。弓奈のポニーテールが空中に豪快な運びで風を描く絵筆のようにぐるぐると回った。生徒たちは弓奈にすっかり見とれている。何度か回ってみせたので弓奈はそろそろ降りることにした。難易度が非常に高いことは確かだが、降り方自体は単純だ。タイミングを見計らって脚を鉄棒から放し、回りながら着地するだけである。少々楽しくなっていた弓奈は完璧なタイミングで美しく脚を伸ばし、鉄棒から降りた・・・はずだった。
「ほっ」
物語の意外性の中には幸と不幸のどちらかが潜んでいる。少なくても弓奈にとってこの瞬間は不幸であった。半年程使用されていなかった室内用鉄棒には相当量のホコリが付着しており、倉庫の湿気と相まって半天然の強力なすべり止めとなっていたのである。これのせいで、手も使わずに脚だけで回っていた弓奈の体操着はなんと

２０センチ程下にズレていたのだ。おまけに鉄棒から脚を離したあとは遠心力が脚部下方に働く。あわれ、弓奈の体操着のパンツは遥か前方に吹っ飛び、弓奈のオトナのパンツが生徒たちの目に飛び込んだ訳である。

「いやあ！」

すぐに事態を察した弓奈はシャツを下に伸ばして必死にパンツを隠した。一部透け透け黒いリボンのＴバックを。その恥じらう姿は非常に可愛いかったが、今更頑張って隠しても後の祭りである。生徒たちの脳裏にはその刺激の強いパンツがすっかり焼き付いてしまったのだから。

こうして弓奈は「かっこよくて、可愛くて、そしてとてもエッチな美少女」として有名になっていくのであった。

4、ふたり

硬派で近付き難い印象を手に入れるためにはそれなりの団体に所属するのが手っ取り早い。例えばクラブ活動である。

硬派なクラブと聴いて何を思い浮かべるかは人それぞれであるが、弓奈の場合は運命と言っても過言ではない強烈な力によってあるひとつのクラブに限定されていた。

「弓道部・・・」

弓道など一度もやったことはないが、名が名なので惹かれるものがある。しかしピカピカの学生手帳のクラブ・同好会の一覧ページに弓道部の記載はない。これほど大きな学園に弓道部がないのは実に残念である。アーチェリーの同好会はあるのだが、これは弓奈の目指すイメージとは少々異なっている気もする。

弓奈はとっくに食堂のエビドリアを食べ終えているのだが、学生手帳とにらめっこをしながらいつまでもお皿の底をフォークでつついている。弓奈は考え事をしている時は他に何もできない少女なのだ。お昼時の食堂は生徒たちでごった返しているのだが、なぜか弓奈の両隣りと向かい側の席には誰も腰掛けない。彼女を遠巻きに見守る生徒たちの想いは同じ。皆弓奈のお近づきになりたいのだ。だがそういった攻めの姿勢を一瞬でも見せれば弓奈に羨望の眼差しを向ける他の多くの生徒から目を付けられてしまう可能性があり、逃げ場のない全寮制女子校においてそれは社会的な死を意味する。

「んー・・・」

彼女らの思惑を知る由もなく弓奈は存在しないクラブについて悩み続ける。この調子では卒業までに友達ができるかどうか怪しいものである。

ふと、弓奈は自分のテーブルからおよそ3メートル離れた食堂の柱時計付近で、掲示物の貼り替え作業をしている生徒を発見した。

弓奈は視力がそこそこいいので、その生徒がたった今貼ったプリントの見出しをかろうじて読むことが出来た。
『学生手帳の記載内容訂正に関するお知らせ』
なんていいタイミングだろうか。もしかしたら弓道部は存在するのかも知れない。弓奈はランチのトレイを持って立ち上がり返却口で丁寧に挨拶をして食器を片付けると、周囲のアツい視線に気づかぬまま掲示板に近づいた。
「何のお知らせですか」
弓奈は係の生徒に話しかける。
「クラブのページに弓道部が追加されたりとか・・・ないですかね」
弓奈の声に少女は振り向きもせず画鋲の刺し直しなどをしている。
「学生手帳の記載内容訂正に関するお知らせです」
少女は冷たい声でプリントに書かれてある通りの回答をした。弓奈はどれどれと言ってプリントを覗き込む。そこには『学園の沿革
十七代目学園長　鈴原真理子ページ六行目：（誤）フラダンス教育表彰→（正）フランス教育表彰』と書かれている。今の弓奈にとっては実にどうでもいい情報だ。
「やっぱり弓道部ないのかぁ」
弓奈がそうつぶやいて肩を落とすと脇にいた少女が口を開く。
「剣道部や柔道部もありません。このあたりがサンキスト女学園は独善的欧化教育を生徒に押し付けていると非難される所以です」
彼女は掲示板を見渡しながら少し怒ったように続けた。
「ですが校風は校風です。文句があるなら入学しなければよかったんです」
弓奈ははっとして少女を見た。どうもこの少女は他の生徒たちと何か存在を異にしている気がしたのだ。こうして自分と話していても少女は一向に緊張する様子もなく、華奢な体で黙々と高所の無断張り紙を剥がしクシャクシャに丸めたりしている。他人を寄せ付けないこの雰囲気、まさに弓奈の理想とする人物像だ。自分もこれだけ硬派な女になれば同性から恋愛感情を抱かれることもあるまいと

弓奈は思った。
「あの！　ひとつ質問が」
「なんですか」
少女は先ほどから一度も弓奈のほうを見ない。弓奈はこの距離感がたまらなく好きだ。
「私、あなたみたいな硬派な人になりたくて！　そういう人が集まるクラブを探してるんです！」
「・・・そうなんですか」
「どこかご存知ないですかね」
少女は掲示板のアルミフレームの埃をティッシュで拭き取ったりしながらしばらく沈黙したのち口を開いた。
「クラブではありませんが、ある意味非常に硬派で人が寄り付かない団体ならありますよ」
「団体？」
「はい」
少女はプリントや画鋲をまとめて帰る準備を始めた。彼女は少しだけ微笑んでいる。
「それにしても、軽薄な女性になりたくないというあなたの高い志、私は感心しました」
彼女は作業中にできたブレザーのわずかな乱れを指で丁寧に整える。ひどく几帳面らしい。
「もしよかったら放課後この棟の屋上へ来て下さい。あなたならきっと・・・」
ここで初めて少女が顔を上げ弓奈と目が合った。そのとたんに少女は動かなくなり、持っていた画鋲をひとつ床に落とした。
「あ、あの・・・どうしたんですか」
少女は弓奈より背がこぶし一つ分低い細身の生徒で、幼げな顔立ちだが凛とした目元から真面目でクールな印象を受ける。だが今はどことなくクールというより乙女チックな表情でじっと弓奈を見つめているのだがそれは何故なのか弓奈には分からない。自分の顔に

何か付いているのだろうかと弓奈は自分の頬や口元に触れてみたりしたが特に何も無さそうである。クールな女性にも乙女な顔をする瞬間くらいあるのだろうと弓奈は納得することにした。
「あの、じゃあ私そこへお手伝いに行っていいんですか」
「え・・・あ、はい」
少女は急に小声になって弓奈から目をそらした。
「き、厳しい作業ばかりですが。それでも平気だという自信がおありなら・・・来てもいいです」
少女は強気とも弱気ともとれる奇妙な物言いをして弓奈に背を向け歩き出す。弓奈は少女の背中に言った。
「私、倉木弓奈っていいます！　どんなお仕事でも頑張ります！あなたみたいになりたいです！」
少女は返事の代わりに一度立ち止まったが、振り返らずにそのまま食堂から去っていった。
「掲示委員会かなぁ」
元より弓奈は頑張り屋なのでそういった委員の仕事に精を出すことに吝かでない。あの少女のようなおカタい娘になり、同性との不用意な接触を避けることで弓奈の理想とするシンプルで無難な学園ライフを手にすることができるはずである。
ふと周囲を見回してみると、二人のやりとりを盗み聞きしようとする女子生徒たちが柱時計の陰に集まっていた。彼女たちは弓奈に見つかると愛想笑いをしてから慌てて散っていった。このようなことは日常茶飯事である。
さて放課後にビッグな楽しみを得た弓奈は、早めに教室に戻ってフランス語の予習でもしようかなどと考えつつ足を一歩前へ踏み出した。その瞬間、彼女はスカートから細くキレイなふとももを覗かせて飛び上がった。
「いったーい！」
画鋲がひとつ落ちていた。

5、紫乃ちゃん

紫乃は弓奈を知っていた。

まだ入学して間もないというのに倉木弓奈の噂は広がる一方だ。絶句する程に容姿端麗な彼女は、教師に指導を入れるほどスポーツ万能で、おまけに時折チャーミングな笑顔とセクシーなパンツを見せてくるらしいといったような噂である。しかし、紫乃の心の中に弓奈が特別大きい存在となっているのには他に理由があった。紫乃と弓奈は学年もクラスも同じ、座席はすぐ隣りで寮部屋も隣接しているのである。昼休みの弓奈はそうとは知らずたまたま紫乃に声を掛けてきたらしいのだ。

「はぁ・・・」

紫乃は屋上の若緑色のフェンスにもたれてため息をついていた。確かに紫乃は曲がったことが許せない大真面目な生徒で、かつ物事を客観視する能力にも優れていると言える。しかし、弓奈が期待するようなクールな女ではない気がするのだ。紫乃は弓奈の前では平静でいられず頬や耳は真っ赤に、頭の中は真っ白になってしまうのだから。こんな感覚は紫乃が初めて経験するもので、先人達はこういった症状が出る病を『恋』と呼んだ。

「はぁ・・・」

食堂では自分がそっぽを向いていたせいで声をかけてきた生徒が弓奈だと気づかず仕事に誘ってしまった。もし弓奈と分かっていたら会話もせずにその場から逃げ出していただろう。それは紫乃が臆病だからではない。弓奈に近づくには大きなリスクを負い、嫉妬の的をなる覚悟をしなければならないからだ。それほどに倉木弓奈という少女は生徒達の注目を集めているのである。自分にはその覚悟も器もない、紫乃はそう考えているのである。

「はぁ・・・」

「はぁ～」
突然すぐ隣りから自分のものでないため息が聴こえたので紫乃は飛び上がってしまった。
「えへ、驚かせちゃってごめんなさい」
そこには紫乃だけを見つめて無邪気に微笑みかける学園のプリンセスがいた。紫乃は心臓はその高鳴りについていけず、壊れて止まってしまいそうである。しかし紫乃はもう後に引き下がれない状況に立ってしまっているので、弓奈の言う「硬派な女性」を演じていくことにした。
「お、遅いです」
「・・・ごめんなさい。保健室に行ってたんです」
見れば弓奈は上履きではなく保健室の貸し出しスリッパを履いている。弓奈が午後の授業にいなかったのはこのためらしい。足の甲に重い物を落としたか、尖ったものを踏んだに違いないと紫乃は思った。本当は紫乃が落としていった画鋲のせいで怪我をしたのだが紫乃はそれに全く気づかない。
「ま、まあいいです。作業を手伝って下さい」
「はい！　でもあの、いくつか訊いてもいいですか」
弓奈の柔かな髪が春風に揺れている。紫乃は弓奈の姿を視界の隅に収めるだけで、彼女を直視することが出来ない。
「し、質問は手を挙げてからにして下さい」
「はーい」
紫乃は不思議に思った。確かに弓奈という生徒は噂通りの魅力あふれる人間だ。だがそれゆえに幼い頃からちやほやされて育ったに違いないなく、いくらか尊大で思い上がった一面があるにだろうと紫乃は信じていた。なのに弓奈のこの無邪気な物腰ときたら、さながら天使である。格好良くて可愛くてセクシーで完璧なはずなのに、それに奢らない献身的努力家・・・そんな少女はこの世にいるはずがないと紫乃は思っていたので混乱をしているのだ。
「いくつか質問なんですけど、まず先輩のお名前を教えて下さい」

弓奈は紫乃のことを先輩だと思っている。紫乃はいわば弓奈の目指す硬派道の師匠なのであるから、なるべくクールに答えることにする。
「あー、私のことは紫乃と呼べばいいです。同級生ですから、呼び捨てでも」
「同級生だったんですか！　じゃあ紫乃ちゃんでいいですか」
あと１０メートルも距離をとれば弓奈の目を見て話すことが出来るのだろうが、紫乃は体が石膏のように固まっていて動けないので無理な話だ。
「しかも・・・同じクラスだったりします」
「ええ！　そうなんだ！　よろしく紫乃ちゃん」
次の瞬間紫乃の小さな手は弓奈の温かい手の中にあった。弓奈は紫乃の手を取ったのである。紫乃は思わず「ひゃ！」と言って手を引っ込めた。弓奈は少し驚いたような顔をしたが、やがて照れながら上目遣いで謝った。
「あ、ごめんなさい・・・ちょっと嬉しくなっちゃって。私友達いないから」
紫乃は弓奈を思いっきり抱きしめてしまいたい衝動にかられた。
「い、いや。気にしなくていいです」
紫乃がそう言うと弓奈は手を自分の後ろに回したまま紫乃の顔を覗き込んだ。紫乃は胸のトキメキを悟られぬようにそっと下を向く。
「ありがとう。紫乃ちゃん。もうひとつだけ質問してもいい？」
「な、なんですか」

「紫乃ちゃんは、女の子に恋したりしないよね」

風が止まった。紫乃は何もかも見透かされているような気がして弓奈の瞳を見た。しかし彼女の瞳はやはり無垢に輝いていて、自分

をからかってこのような事を訊いてきたとは思えない。まだ紫乃の胸の内はバレていないのだ。紫乃は弓奈の向こうを流れる白い雲に視線を逃がしながら、平然を装ってこう答えた。
「あ、当たり前です。それどころか、恋そのものに興味がないです」
「やっぱり！　紫乃ちゃんは本当に硬派なんだねぇ」
弓奈が再び紫乃の小さな手をとる。からまった二人の細い指先に、紫乃は長い旅路の始まりを予感した。
「・・・紫乃ちゃんに会えてよかった」
弓奈がそうささやいて目を閉じる。彼女の微笑みに紫乃は、幼い頃によく遊びに行った古い教会のステンドグラスに佇む女神様を見た気がした。弓奈の体と心から、透き通った輝きと柔らかで離れがたいぬくもりを感じたのだ。もしかしたら倉木弓奈という少女は計り知れないほど性格が良い娘なのではないかと紫乃は思った。その証拠はどこにもないのだが。

弓奈の指先から微かに消毒液の香りがした。

6、アイス

「これで最後かな」
二人の頬が夕日の茜色に染まっている。
「そ、そうですね。もう寮に戻りましょうか」
弓奈が手伝った仕事はそれほど複雑なものではなかった。サンキスト女学園では6月に体育祭を執り行う。なぜわざわざ梅雨の時期を選んでいるのかは不明だが、新クラスのメンバーとの親睦を深めるいい機会であることは確かなので楽しみにしている生徒もいる。ところがこの体育祭で毎年使用されていた得点板がこの春、とある体育教師の手違いで処分されてしまっていたのだ。やむを得ず新しく作成することになったのだが、得点板を屋上のフェンスに設置する際の金具の発注をまずしなければならず、そのサイズを調べる必要があったのだ。二人が行った作業は体育教師香山里歌の見にくい図を参考にフェンス各部の長さや幅、高さをメジャーで測るというものだった。掲示委員会はこんな仕事もするのかと弓奈は感心し、せっせと働いた。
「ねえ紫乃ちゃん」
夕焼けの照る広い渡り廊下に長い陰が二本並んでいる。
「どうしたら紫乃ちゃんみたいにクールになれるかな」
弓奈の質問に紫乃はすました顔で答える。
「そ、そうですね。普段からヒステリックでセンセーショナルな事物を避けることが肝要です」
「へぇー」
弓奈にとって紫乃は先生のようなものだ。
「あとは冷たいものを毎日たくさん食べることですね」
「え、アイスとか？」
「はい。主食を氷菓にすることで脳内を低温に保ち、外界の刺激に

対し常に冷静な判断を下します」
「すっごーい」
紫乃はすぐに後悔した。まだまだ朝晩冷えるというのに調子に乗ってついいい加減なことを言ってしまったのだ。
「クールな女の子になるのも大変なんだねぇ！」
「た、大したことじゃないですよ」
「いやいや！　すごいよ紫乃ちゃん」
弓奈が妙に子どもっぽいのは紫乃に心を開いている証である。容姿端麗にしてスポーツ万能なモテモテ少女も本当は甘えん坊なところがあるということなのだ。
二人が寮の昇降口に差し掛かったとき、弓奈は「ちょっと寄っていっていい？」と言ってエントランス内のコンビニを指差した。サンキスト女学園のコンビニエンスストア『Ｆｏｃａｃｃｉａ　Ｄｏｌｃｅ』通称『フォッカ』は学園内に４店舗展開しているらしいが弓奈は一年生寮店しか見た事が無い。弓奈は紫乃と共に店内に入るとアイスコーナーへ向かった。
「私も実践する！」
弓奈はそう言って３０円アイスを3本カゴに入れた。サンキスト女学園名物３０円アイス・・・化学調味料一切不使用で有機野菜のたっぷり入った健康的シャーベットであり、二年生寮のオーロラパフェ、三年生寮のリリーマシュマロに並んで雑誌で紹介される程の人気商品である。
「紫乃ちゃん。今日はもう冷たいもの食べたのかな」
紫乃はビクッとして顔を上げた。
「ま、まだでした。私も買って行きます」
さすが弓奈の師匠である。紫乃は慣れない手つきでアイスを5本カゴに入れてレジに並んだ。
クラスが同じということまでは紫乃に聴かされていたのだが、寮の部屋もお隣りだったなんて知らなかったので弓奈は大喜びした。弓奈は廊下に人がいないのを確認すると屋上にいた時と同じように

紫乃の手を取って「紫乃ちゃんが隣りでよかった。よろしく。よろしくね」と何度も繰り返した。紫乃はドキドキしてしまって目をそらしながら黙ってうなずくのが精一杯だった。
　さて自室に戻った弓奈がアイスを冷やそうと冷凍庫を開けると、中にはすでにカボチャ味の３０円アイスが二本入っているではないか。すっかり忘れていたのだが、これは香山先生から貰ったのだ。
　一昨日の昼休み、本でも読んで現実逃避しようと思った弓奈が桃色の毛糸であやとりをしつつ図書室に向かっていると、前からバイオリンケースを抱えた香山先生がやってきた。体育教師のくせになぜそんなものを持っていたのかは不明だが、弓奈が遠慮がちに挨拶をすると香山はご機嫌な様子で近寄って来た。
「倉木さん。この前はごめんなさい」
「え」
「みんなの前で恥ずかしい思いさせちゃったでしょ？」
　パンツのことである。
「あ、いえいえ。別にいいんです。全然気にしてないですから」
　気にしていない訳がないが、先生のほうから謝られてしまったら弓奈も何も言えなくなってしまう。
「おわびにねぇ、これあげる！」
　香山先生はポケットに手を入れたりカバンを探ったり胸を触ったりしたあと「あ、ここだった」と言ってバイオリンケースを開けた。
「もうすぐハロウィンだからさぁ。ほらぁ、カボチャ味だよ」
　中から出て来たのがその３０円アイスだった。もちろんドロドロに溶けている。
「あ・・・先生、ハロウィンは十月だった気がするんですけど」
「遠慮しないの。はい。はい。二本あげるね」
　先生は先生なりにこの前のことを気にしていたのかも知れない。こうして弓奈は香山先生の強引な罪滅ぼしに付き合わされアイスを二本先行入手していたのだった。
「そうだ」

弓奈はカボチャのアイスを持ってお隣りの紫乃を再び訪ねた。確か紫乃が買ったアイスの中にカボチャ味はなかったはずなのでお裾分けをしようと思ったのだ。お米やパンの代わりにアイスを食べているらしい紫乃ならばアイスは何本あってもありすぎるということはないだろう。扉をノックするとオレンジ色のアイスをくわえた紫乃が顔を出した。こうして見ると紫乃は前髪をそろえるとすごく可愛くなる気がした。いつか髪をカットする時に提案しようと弓奈は思った。

「これ余ってるの。あげる」

弓奈の差し出したものを見て紫乃は目を丸くする。

「あ、ありがとうございます。いえ、5本じゃ足りなかったくらいですから」

本当は5本のアイスの処理に困っているくらいなのだが紫乃は本当のことを弓奈に言えない。

「喜んでくれて嬉しい！　やっぱりクールだなぁ紫乃ちゃん。それじゃ、おやすみ」

自室に戻りゆっくりシャワーを浴びた弓奈は、楽しみにしていたアイスを食べ始めた。弓奈は食いしん坊なのでニンジン味とナス味を二本同時に食べてみることにした。入寮記念に貰ったボディータオルは非常にキメの細かい泡を生んでくれるのでいつもより肌がすべすべになったような気がする、あのタオルはフォッカで売っているのだろうか・・・などと考え事をしていると、なんとアイスの容器の内側から『当たり』の文字が現れた。しかもよく見ると二本とも当たりだったのである。弓奈は部屋からの外出が禁止される夜9時ぎりぎりにコンビニに駆け込み、そこでアルバイトをしている二年生の生徒からキャベツ味のアイスを二本もらってきた。ふかふかのカーペットが敷かれているとはいえ階段を猛ダッシュする弓奈は自分が足に怪我をしていることをすっかり忘れているとしか考えられない。

「紫乃ちゃん」

扉の前から声をかけると紫色のパーカーを来た紫乃がフードを被った状態でゆっくりと顔を出した。なぜか唇もちょっぴり紫色である。
「紫乃ちゃん。これ、二本当たり出たから一本あげるね」
紫乃は弓奈の差し出したものを見て一瞬怯えたような表情をしたが、すぐに強気で涼し気な顔に戻りアイスを受け取った。
「あ、ありがとうございます。いえ、６本じゃ足りなかったくらいですから」
「紫乃ちゃんかっこいいなぁ！」
「いつものことです。こ、こ、これっくらい」
「私も頑張って紫乃ちゃんみたいになる！　これからもいっぱい勉強させて下さい！」
「私くらいクールになるには、相当な鍛錬が必要ですよ」
「頑張ります！」
「き、期待してますので」
「うん！　それじゃあ、また明日ね。おやすみ」
「お、おやすみなさい」
扉を閉めた瞬間、中から紫乃のクシャミが聴こえた気がしたのだがきっと弓奈の気のせいだろう。

7、生徒会長

「何か作ってあげようか」
「・・・いいです」
「お着替え手伝おうか」
「じ、自分でできます！」
　何故か風邪を引いてしまった紫乃のために弓奈は朝っぱらから付きっきりで看病をしていた。部屋に二人っきりで、しかもベッドに横になる少女の手を握るなど今までの弓奈ならば怖くて出来なかった。しかし、相手は安心安全な紫乃ちゃんである。紫乃はクールで硬派な少女なので弓奈に恋をすることは絶対にないはずなのだ・・・弓奈はそう信じている。
「私のことはいいですから、弓奈さんは授業へ行ってください」
「でも・・・」
「あ、あなたと一緒にいると、暑苦しくて熱が上がるんです」
　確かにそうかも知れないと弓奈は照れながら紫乃の手を離した。
「んーそれじゃあ、学舎行って来ようかな」
「あ、ひとつお願いをしてもいいですか」
　そう言って紫乃はベッドの脇に置かれていたカバンから昨日二人で作った得点板に関するメモを取り出した。
「本来は香山先生に提出する予定だったのですが、来週の金曜日まで先生はいらっしゃらないらしいので、生徒会長さんに渡さなくてはなりません」
「セ、セイトカイチョウ？」
「はい。体育祭の件はすべて会長さんがまとめていらっしゃいますので。生徒会長は二年Ｆ３組の小熊アンナさんという方です。少し変わった人ですので充分気をつけて下さいね」
「こ、小熊さん・・・」

きっと冬は穴蔵でじっとしている可愛い先輩に違いないと弓奈は思った。弓奈はメモを受け取ると紫乃のほっぺをつついて彼女に言う。

「私に任せて。だから紫乃ちゃんは無理しないでゆっくり休んでね。今日の紫乃ちゃんはクールじゃなくてホットなんだから」

「わ、わかりましたから・・・頬を・・・さわらないで・・・」

サンキスト女学園は土曜日も毎週授業が行われるがそれも午前中で終了する。弓奈はお昼ご飯を食べにいく前に生徒会長を探すことにした。会長が二年生寮に帰ってしまうと月曜日まで会えないと考えたからである。弓奈は学生手帳の教室案内図からＦ３組を探していたが、ふと思い立ってページをめくり校内見取り図を開いた。

「えと、生徒会室は・・・」

廊下の窓際で学生手帳をにらむ美少女・・・案外絵になるものである。

生徒会室は管理棟の3階にあった。管理棟と言っても職員室は学舎にあるので生徒はおろか職員すらもほとんど寄り付かない場所である。青い銀杏並木を抜けて管理棟にたどり着いた弓奈は、上履きの代わりにスリッパをつっかけて辺りを見回した。遠くから運動部員たちのかけ声とテニスボールの跳ねる音が聴こえるだけで、そこには人っ子一人おらずひんやりした空気だけが静かに漂っていた。こりゃ会長さんいないなと弓奈は思ったが、念のため生徒会室を目指してワイン色のカーペットが敷かれた薄暗い階段を上っていく事にした。

扉には『会長室♪』という微妙に的外れなルームプレートが掛かっていた。しかし校内見取り図によれば生徒会室はここで間違いない。弓奈は制服のリボンが曲がっていないかなどを確かめてからそっと扉をノックした。

「はい」

二度目のノックをしようとしたとき扉は軽やかに開く。中から顔

を出したのは弓奈の想像を遥かに超える存在感をもった少女だった。
「どなたかしら」
この規則の厳しいサンキスト女学園で、ましてやその生徒会長がブロンドヘアーだなんて信じられるだろうか。おまけに瞳にはカラーコンタクトと思しき翡翠色の輝きを灯し、部屋の中からはどことなくヨーロピアンなハーブの香りが漂ってくる。会長は少し変わった人なので注意するようにと言った紫乃の言葉が弓奈の頭をよぎった。
「あの、これ香山先生に頼まれた得点板のメモです。生徒会長さんに渡すよう言われていたので参りました」
小熊会長の顔をよく見れば日本人の顔立ちでありながら髪と瞳の明るい色が非常によく似合っている。もしかしたら会長はハーフなのかも知れないと弓奈は思った。
「あら、そうなの。委員のポストに入れてくれてもよかったのに、わざわざ来て下さったのね」
「お仕事のジャマをしてしまってすみません・・・」
本当に仕事をしていたかどうか怪しいというのに弓奈は素直な少女である。小熊会長はメモを受け取ると弓奈の頭のてっぺんからつま先までじろじろと見てこう言った。
「あなたもしかして、一年生の倉木さんかしら」
いったい自分の体のどこに名前が書いてあったのか弓奈に心当たりはなかったが、戸惑ってばかりでは会長さんに失礼なので「はい」と返事をした。すると小熊会長は子ネコのように人懐っこく微笑んだ。
「階段を上がってきておつかれでしょう。中で少し休んでいかれたらどうかしら」
「あー・・・いえ、私体力だけはあるので、その・・・平気です」
帰ろうとする弓奈を引き止めるために小熊会長は彼女の背後に回って腰にそっと手を触れた。
「遠慮しないでいいの。良質なダージリンが入ったから紅茶を淹れ

てあげるわ」
「で・・・でも」
「とってもいい香りなのよ」
いくら頼まれ事を果たしたからといって自分が生徒会長とお茶できるような人間でないことは弓奈自身よく分かっている。だが小熊会長の執拗な誘いをこれ以上断る理由も気力もなく、少しだけ生徒会室に寄っていく決心をした。
「じゃああの、少しだけ」
小熊会長が左の頬だけでひっそり笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7545w/

おんなのこ×おんなのこ

2011年11月16日03時21分発行